

2024年2月2日 全4頁

# 議決権行使助言業者の2024年方針（更新）

## ISSとグラスルイスが2024年株主総会向け新方針を公表

政策調査部 主席研究員 鈴木 裕

2023年12月28日発行の大和総研レポート「議決権行使助言業者の2024年方針」の更新版。ISSとグラスルイスの両社から2024年方針の日本語版が公表されたため、用語や文章表現を両社日本語版に合わせたほか、脚注文書のリンク先を更新。

### [要約]

- 2024年の株主総会シーズンに向けたISSとグラスルイスの議決権行使助言方針改定が公表された。
- ISSは、コロナ禍によって適用を一時的に停止していたROE基準の適用再開を決めた。また、買収防衛策について判断基準を一部厳格にしたが、ISSは買収防衛策関連の議案には、既にほとんど全て反対投票を推奨しているため、今回の改定の影響はほぼないだろう。
- グラスルイスは、女性役員不在の場合の賛否判断の基準に関連して設けていた例外規定の適用停止や、気候変動に関する情報開示の状況を考慮する基準の適用対象を拡大する等の改定を行う。また、2025年以降向けの改定についても公表した。

## 議決権行使助言業者が助言方針改定を公表

議決権行使助言業者のISS (Institutional Shareholder Services Inc.)<sup>1</sup>とグラスルイス (Glass, Lewis & Co. LLC)<sup>2</sup>が2024年以降の株主総会議案に対する議決権行使助言方針の改定を決定した。改定内容は、2023年12月28日発行の大和総研レポート「議決権行使助言業者の2024年方針」で紹介した通りだが、このほど両社から日本語版が公表されたことに合わせて、用語や文章表現を更新した。

改定の内容に新味はないが、反対投票推奨が出やすくなる方向での改定なので、議決権行使助

<sup>1</sup> ISS 「[2024年版 日本向け議決権行使助言基準](#)」

<sup>2</sup> グラスルイス 「[Japan 2024 Benchmark Policy Guidelines](#)」

言業者を利用することの多い海外投資家から、経営トップ等の取締役再任議案への反対票が増加する恐れがある。上場会社としては、これまで以上に投資家とのコミュニケーションを密にとり、自社の株主総会議案への理解を得る努力が必要になるだろう。

## ISS の助言基準改定

ISS の議決権行使助言基準の改定は次の 2 点だ。

### ① ROE5%基準の適用再開

ISS は、資本生産性が低く（過去 5 期平均の自己資本利益率[ROE]が 5%を下回り）かつ改善傾向（過去 5 期の平均 ROE が 5%未満でも、直近の会計年度の ROE が 5%以上ある場合を指す）にない場合、経営トップ（通常、社長、会長を指す）である取締役（企業再編などにより新たにその企業に入社したばかりの経営トップなど例外的な状況においては、反対を推奨しないことも検討される）の再任議案に反対投票を推奨するとの方針を有していたが、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して 2020 年から適用を猶予していた。2024 年 2 月以降は、この基準の適用を再開する。

### ② 買収防衛策関連議案の判断基準厳格化

買収防衛策の導入や継続が株主総会議案になった際に、ISS は取締役会の構成や買収防衛策発動検討の特別委員会の構成、トリガー、継続期間など多くの形式基準を設けて、賛否を検討している。その形式基準適用後、さらに個別の判断を経る。

今回の改定では、買収防衛策を導入・継続する企業の取締役会構成に関する基準を厳格化する。従来は、「総会後の取締役会に占める出席率に問題のない独立社外取締役が 2 名以上かつ 3 分の 1 以上である」ことを賛成投票推奨の条件の一つにしていた。この取締役会の独立性基準を「出席率に問題のない独立社外取締役が過半数である」に引き上げる。なお、ここでいう「独立」とは、ISS の独立性基準を満たしていることを意味するので、企業側の判断とは異なる場合がある。

「2 名以上かつ 3 分の 1 以上」を「過半数」に引き上げることは、一見大きな変化であるようにも感じられるが、実際にはあまり大きな影響はないだろう。というのも、既に ISS は、買収防衛策関連の議案のほとんど全てに反対投票を推奨しているからだ。買収防衛策関連の議案に対しては、2022 年は 100%、2023 年には 99.1%に反対投票を推奨した<sup>3 4</sup>。

<sup>3</sup> ISS 「[2023 年版 日本向け議決権行使助言基準](#)」 p. 33

<sup>4</sup> 脚注 1 資料 p. 36

## グラスルイスの助言基準改定

グラスルイスの議決権行使助言基準の改定は次の通りだ。

### ① ジェンダー・ダイバーシティ

プライム市場上場会社の取締役会に占める多様な性別の取締役を 10%以上求める方針に付随していた例外条項の適用を停止する。例外条項とは、ダイバーシティ促進に関する企業の開示情報を精査し、現状の不十分なダイバーシティに関する十分な説明、今後の改善計画や取組みなどが開示情報において確認できる場合には、不十分なジェンダー・ダイバーシティを理由とした反対投票推奨を控えることもある、というものだ。この例外条項の適用が停止されることによって、多様な性別の取締役が 10%に満たない場合、監査役会設置会社または監査等委員会設置会社では取締役会議長、指名委員会等設置会社では指名委員会の委員長の選任に例外なく反対投票が推奨されることになる。

なお、多様な性別とは、男性と女性以外の性別の役員も含むとされるが、日本市場においては、実質的には、女性を意味するとのことだ。

また、2026 年 2 月以降は基準値を 20%に引き上げるとのことだ。

### ② 政策保有株式

政策保有株式に関しては、2025 年以降、以下のように変更される。

現行	2025 年以降
<p>政策保有株式(有価証券報告書で開示された「保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式」の「貸借対照表計上額の合計額」)が、連結純資産の 10%以上の場合、原則、取締役会議長に反対投票を推奨する。</p> <p>ただし上記基準値を超える政策保有株式を保有していても、次のどちらかに該当するのであれば、反対投票推奨を控える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 明確な縮減目標値と期日を含む縮減計画が開示されている場合</li> <li>● 政策保有株式の保有比率が、対連結純資産の 10%以上 20%未満のときには、当該企業の過去 5 年間の自己資本利益率(ROE)の平均値が 5%以上である場合</li> </ul>	<p>【例外的に反対投票推奨を控える場合の基準を次のように変更する】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 政策保有株式の保有比率を、今後 5 年以内に対連結純資産の 20%以下にするための明確な縮減目標値と期日を含む縮減計画が開示されている場合</li> <li>● 政策保有株式の保有比率が対連結純資産の 10%以上 20%未満で、当該企業の過去 5 事業年度の自己資本利益率(ROE)の平均値が 8%以上、あるいは直近事業年度の ROE が 8%以上である場合</li> </ul>

### ③ 取締役会構成

2025 年以降は、社外取締役全員または社外監査役全員の在任期間が連続 12 年以上の場合、監査役会設置会社または監査等委員会設置会社では取締役会議長、指名委員会等設置会社では指名委員会委員長に対して、反対投票を推奨する。

#### ④ サイバーセキュリティ

全ての企業は、サイバーセキュリティに関わる事項を監督する取締役会の役割について、明確な開示を行うべきである。原則として、サイバー関連の問題における企業の監督や開示に基づいて取締役選任議案を判断することはないが、サイバー攻撃によって株主に重大な損害が生じた場合、この点に関する企業の情報開示を精査し、その開示内容や監督が不十分であると考えられる場合には、責任を負うべき取締役に対して反対投票を推奨することがある。

#### ⑤ 気候関連問題に対する取締役会の説明責任

従来、「Climate Action 100+などの団体によって特定された企業」など巨大企業で温室効果ガス排出が莫大である（the largest, most significant emitters）ところを想定して、気候関連問題に対する取締役会レベルの監督責任を明確に定義した開示がない場合や、または、開示が著しく不十分であると判断した場合には、その責任があると思われる取締役の選任議案に反対投票を推奨することがあるとの基準があった。今回の改定で2024年2月以降は、この基準の適用対象を温室効果ガス排出が財務上重大なリスクであるとサステナビリティ会計基準審議会（SASB）が判断した業種に属する日経平均株価指数構成企業、及び排出量や気候変動への影響、あるいはステークホルダーの関心が高く、財務上重大なリスクであると考えられる企業に広げることとなった。